

九州産業大学『基礎教育センター研究紀要』第十五号 抜刷
二〇二五年 二月二十八日 発行

「なにもものにもなれる」は「なにもものにもなれない」か

— ロンドン滞在の記録 —

宮内紀子

【研究ノート】

「なにもものにもなれる」「は」「なにもものにもなれない」か

— ロンドン滞在の記録 —

宮内紀子

はじめに

2023年8月26日から1年間の海外研修のためイギリスのロンドンとエジンバラに滞在した。私の専門分野は憲法で、なかでも国籍や国民などを研究対象としている。いつもは判例、論文やニュースを読んで研究している。イギリスではこれに加え、研究者との交流も行っていた。ただ、どの国もアカデミックはその国の「特殊な人」。私の研究テーマからしても、せっかくイギリスにいるのだから「普通の人」のことを知りたいと思っていた。また孤立を防ぐという目的もあって、滞在中、意識的に人とかかわった。その結果、憲法研究者としてはかなりおかしな滞在になった。その一部を少し研究に寄せてエッセイとして残すことにした。

ある秋の日、イギリス憲法研究会の元山健名誉教授から「毎日図書館に籠っていないよね？」とメールをいただき、それをきっかけに頻繁に日々の生活を報告していた。やりとりには、途中から「紀

子通信」というタイトルがついた。さらに形に残すことも勧めていただき、これが今回のエッセイ執筆のきっかけとなった。今回の滞在では本当にたくさんの方に助けてもらった。全員の名前を挙げることはできないけれど、今回のエッセイ執筆のきっかけとなった元山健名誉教授と白石真子先生には感謝を申し上げたい。お二人には本当に頻繁にご連絡をいただいた。私の家族よりもイギリスでの私の生活のことをご存じだと思う。本当に心強かった。

「わたしたちには伝統や文化なんてない。」

「わたしたちには伝統や文化なんてない。」イギリス滞在で最も印象的だった言葉である。これを聞いたのはロンドン市内のミッチャムの西側にある、コミュニティーセンターの料理教室だった。私が住んでいたフラットからバスで片道2時間近くかかった。それでも毎週、この料理教室が待ち遠しかった。唯一の楽しみだったといっ

もいほどだった。

憂鬱なロンドン

2023年の冬のはじめ。私はとんでもなく憂鬱というか精神的に追い詰められていた。理由はルームメイト。ロンドンのウエスト・ハムステッドで50代の女性とのシェアフラットに住んでいた。当初、彼女は優しく社交的だったので、ラッキーだと思った。

ところがしばらく住んでいるうちに、いろんな問題が出てきた。私の生活に干渉し、何度か無断で私の部屋に入室していた。精神的にこたえたのは、彼女の帰宅時間に私の洗濯が終わっていないなど彼女の希望にそぐわないことがあると、階段の上から見下ろされたうえで声を荒げられることだった。でも、私にお願いごとがあるときは、階段を下りて私の部屋の前までやってきて、猫なで声でお願いするのである。態度の変わりようにものすごく戸惑い、自分が悪いのかとも思うようになり始めた。

いろいろ考えたけれど私に落ち度はなさそうだった。彼女が何に怒り狂うのが、私にはわからなかった。会わなければ怒られないとにかく顔を合わせないように、文字通り息をひそめて生活していた。ちなみに後でわかったことだけれど、大家は別にいて、彼女は大家に無断で、私に部屋を貸していた。又貸しだった。彼女には家賃を毎月900ポンド(約18万円)払っていたが、このザマである。

まともな人に会いたい、まともな会話がしたいと日々、心から強く願っていた。リージェント・ストリーートのクリスマスのイルミネーションや有名ブランドのショーウィンドウがキラキラしていたけれども、自分の生活がそれとは対照的で、自分がとてもみじめに思えた。

「ニセモノの日本人」

とにかくフラットから離れたたい(立地はよかったし滞在には期限があったから引越したいわけではなかった)。そしてまともな人と話がしたい。そんな理由から、趣味の一つに料理があったので、ロンドンの料理教室をアプリで定期的に検索していた。そこで冒頭の料理教室を見つけた。その料理教室にたどり着くまでに、いくつか料理教室に行った。それほど数は多くなかったけれど、無料のものもあった。缶詰で作る料理のデモンストレーション教室、女性支援団体開催のアフリカ系料理教室、インド料理教室など。

缶詰料理教室の先生のエミリーは、私が日本人だと知ると少し気まずそうな顔をしていた。彼女の披露したレシピはお好み焼きだった。その日が先生としてのデビューだったらしく、運が悪いと思っていたかもしれない。

そういえば、何度か通った後、彼女は自身のことを「impoter Japanese (ニセモノの日本人)」と言っていた。彼

女の父はイギリス人、母は日本人。生まれも育ちもイギリスのようだった。私は「ホンモノの日本人」なんだろうか。

ミッチャムの料理教室

物価の高いロンドン生活で無料の料理教室はありがたかった。でも空きがなかったり、開催期間が限られていたりした。定期的に開催されて参加しやすい教室は1回1〜2万円した。高額な料理教室に参加しているのはポツシユ（お上品）な人が多く（たいてい白人、下町育ちだからか、私にはあまり居心地がよくなかった。それにコースでもなかった）、その場限りの関係性だった。

冒頭のミッチャムの料理教室は節約をコンセプトとしていて、ラタトゥイユなど日常的な料理を教わった。先生は私と同世代のケイティ。参加者はケイティの姉のアンドレア、彼女の親友のルイーズ、時々ルイーズの母のバープ、スー、ベスそしてエマが加わった。ケイティが作り方を説明しながら、キッチンで、みんなで一緒に話をしつつ料理をして、最後は、彼女たちの子どもや孫たちと一緒に食事をした。ルイーズは、調理は好きではないとのこと。キッチンカウンターの外からおしゃべりに参加していた。料理教室なのに調理をしないという自由もあって、おもしろかった。ちなみに、ルイーズは料理もするが、パートナーのロイのほうが料理上手とのこと。家に招待してもらったときは毎回ロイが作ってくれた。

ケイティには内緒だけれど、付け合わせのプロッコリーを食感がなくなるほど長く、くたくたにゆでているのを見たときに、この教室に参加してよかった！と心から思った。リアリティ番組で見たイギリスの家庭料理そのものだった。

冒頭の発言したのはベスだった。私が日本人であるを知ると、羨ましがって冒頭のことを言った。隣にいたルイーズも「そうそう」と同調していた。驚いた。私にとつてのイギリスは、エイミー・ワインハウスやアデルだけれど、『ダウントン・アビー』みたいな、伝統や文化のある国というイメージを持っている人は多いはず。

イングリッシュはどこに？

でも思い返せば、似たようなことをすでに学生の頃からの友人のサミーナから聞いていた。彼女とは大学の特別講義で出会った。日本とイギリス、互いの大学で2週間ずつ交互に講義を受講するという総勢30人ほどのプログラムだった。久しぶりに再会して私の研究テーマから彼女のアイデンティティーの話になった際、「私自身はイングランド人だとは感じない。ブリティッシュの方がしっくりくる。イングリッシュローズっていう言葉があって、頬がピンク色の女性が典型的なイメージ。私はそうじゃないでしょ。」と話していた。

話は変わるが、スコットランドや北アイルランドではそれぞれの国旗を土産物屋や民家で見かけた。でもイングランドではスポーツ

以外でほぼ見かけなかった。むしろ、ナイキがサッカーのイングランド代表ユニフォームのイングランド旗デザインを「アップデート」して、大きく報道されていた。

テイラー・スウィフトの思い出

春先、私はエジンバラ大学で研究するために引越した。ただ、ロースクールの規定で受入れは最長で3か月だった。短期滞在用の物件は、大学が運営しているもので1か月約40万円近かった。在外研究で自室を不在にする教員から部屋を紹介してもらえそうだったが、1か月約30万円。私には到底払える金額ではなかった。だから民泊やホステルの共同部屋を転々とした。(それでも20万円以上はなかった。)気が休まらなかったけれど、いろんな人と話す機会があったし、大学まで徒歩数分というホステルもあったのでそれなりに気に入っていた。ただときどき、とくに週末になると予約がとれなかったり、値段が高騰したりして、エジンバラを離れなければいけなかった。テイラー・スウィフトのコンサートがあったときは、民泊の宿泊料が一泊5万円を超え、街を出ることになった。ちなみに、ロンドンのルームメイトはテイラー・スウィフトに似た雰囲気だったため、ニュースで見るたびに心臓がぎゅっとなった。

北イングランド

エジンバラ市内はテイラー・スウィフトを歓迎して飾り付けをしていたけれども、私は彼女とそのファンに押し出されるように、北イングランドに向かった。せっかくなので北イングランドに住む友人のリーラに会うことにした。彼女とは、趣味がきっかけで、SNSで長年交流があった。でも会うのは初めてだった。彼女はときどき自身の写真を載せていたけど、私は外見や職業をオープンにしない。そんな状況なのによく会ってくれたと思う。

リーラにイングランド旗を見かけないことを聞いた。彼女は「確かに、イングランド旗はあまりないね。人種差別的なグループがイングランド旗を使って、普段から飾るとそういう意味合いだと思われる。だからみんなサッカーのイングランド戦があるとき以外は飾らないんだと思うよ。」と言っていた。

そういえば、リーラに私の研究テーマを話したところ、関係があるのではとアニタを紹介してもらえた。アニタは君主制の熱心な支持者で、王室グッズの所有者でギネス記録を持っている。ユニオンジャックのグッズも大量にあったが、イングランド旗のものは見なかった。彼女の場合、イングランドではなく「連合王国」が好きだからだと思う。ちなみにアニタは王室そのものには興味はなく、制度を支持しているそう。けれども19世紀頃の王室メンバーやウォレス・シンプソンの噂話もたくさん教えてくれた。

イングランド人の憂鬱？

北イングランドでいうと別の機会に、友人のマークにも会った。彼はサミーナの同級生で同じプログラムで出会った。なんと、同業者になっていた。たぶん向こうの方がびっくりしていたと思うけれど。彼の専門は社会学だった。『伝統や文化がない』ってびっくりした。だって日本だと、「紳士」「紅茶」とか、風景とかも、日本人にとってはイギリスで思いつくものって、イングランド的なものじゃない？」と私が言うと、「それは全部僕たちのものじゃないよ。」と言っていた。あれこれほかにも聞きたいことがあったし、マークはものすごく早口で私の集中力が途中で切れそうだったこともあって、あまり追及できなかった。ちなみに、マークは両親がスコットランド出身だから、自身のルーツはスコットランドにあると認識しているらしい。でも「僕たちのものじゃない」はスコットランド人だから関係ない、ではなくて階級のことを言っているのかなと思った。たまたまかもしれないけれど、自分をイングランド人だと思っている人にあまり出会わなかった。そして出会っても肩身が狭そうにしていた。イングランド人の一般的なイメージはかなり良くなって、たまたま道端で話したアイルランド人は私がロンドンに滞在していたと知ると、「イングランド人は意地悪だ。」と言っていた。彼女がイングランド人に具体的に何をされたのかは知らない。

リーラの母のバーバラには、イングランド人が親切かどうか聞か

れた。SNSで長年付き合いがあるとはいえ、初対面なのにリーラは私に会ってくれたし、アニタやバーバラは私の質問にも丁寧に答えてくれた。少なくとも彼女たちは優しくかった。「親切ですよ。」と答えるとほっとした表情だった。

エジンバラ大学で会った研究者のチームもイングランド人だった。彼も憲法学から市民権を研究しているため会うことになり、アイデンティティーの話になった。確かちょうどサッカーのヨーロッパ大会の決勝、イングランド対スペイン戦の直後だった。

決勝戦当日、私はスコットランド人がどんな様子なのか見たくて、パプに行った。当時、私は郊外の民泊に宿泊していた。パプは、その近くで、地元の人が集う場所だった。30人くらいが観戦していたと思うが、1人を除き全員がスペインを応援していた。なんとなく予測はしていたけれども、ものすごくおもしろかった。

チームにこのことを話すと、「昔から、スコットランドのイングランドに対するライバル視はすごいです。とくにスポーツ。僕は、スポーツに全く興味がないって言ってるのに、スコットランド人の先生からイングランド戦があると毎回何か言われます。とくに負けた時なんかは。でもイングランドではそんな風ではなくて、スコットランドを応援しているんですよ。ライバルとかなんとも思っていないの。」と言っていた。なんとも思っていない。悪気はなさそうだったけれど、そういうところなのかなと思った。

なにものにもなれる気がした

ロンドンではイングランドだけではなく、イギリスでも特別な街。確かに憂鬱だったけれども、いろんな場所があって、いろんな人がいた。

私が住んでいたウエスト・ハムステッドは、端ではあるがポツシユなエリアだった。サッカーのヨーロッパ大会のイングランド初戦も、私が行ったパブではみんな着席して静かに観戦していた。有色人種はウエイター人と私だけであとはみんな白人だった。

北西部のウエンブリーはインド系住民が多く、通りはスパイスの香りがした。このエリアでプリクストンから買ってきたアフリカの布地でモンペを仕立ててもらった。最初に来上がったものはごく普通のゴムウエストのスボンだった。見本のモンペと同じになるまで何度か通うハメになった。「履けるんだから問題ないだろ？」と言われた。なんとなくそんなことを言われそうな気がしていて、どう答えるかをあらかじめ考えていたのでおかしかった。

印象に残っているのはベツカム。南部のプリクストンやベツカムはアフリカ系住民が多かった。買い物をせずただ歩くだけでもおもしろかった。見たことのない葉物野菜や燻製の魚があった。燻製の魚はカチカチに見えた。どう調理をするのだろうか。聞いてみるべきだった。大きなお尻がよいとされているためか、女性用の衣料品店に、パットの入ったボクサーパンツみたいな下着が並べられてい

たのはびっくりした。

ベツカムを散策しているときに、店頭飾られているアフリカ系の布地で作ったワンピースが目にとまった。私の研究対象には旧植民地からの移民も入る。イギリスにせっかく来たのだから旧植民地関連のもの、日本では手に入りにくい、アフリカなどの衣服が欲しいなと思っていた。ただ、よくあるアフリカ系の伝統的なワンピースは柄や色もはっきりしている上に、大きなフリルとパフシヨルダーで形も派手だった。派手なものは着るけれども、日本で着るのはさすがに難しいかなと思っていた。目にとまったワンピースは、布地はアフリカのもので、デザインは欧米風だった。

その店の商品はジョイとギャレットがデザインし、ギャレットが仕立てていた。アンバーがときどき店番をしていた。ジョイとアンバーとはよく話をした。ジョイはいくつか仕事を掛け持ちしているようで大体忙しそうにしていた。ギャレットは寡黙で、縫製が正確だった。

実はジョイは元公務員で、私の研究テーマにかかわる部署にいたようで、許される範囲で話をしてくれた。なぜそんな問題が起きるのか、書籍を読むだけだと、理屈としてはわかるけれど少しモヤモヤが残っていることもあった。彼女の話のおかげでモヤモヤが解消した。どこでどんな人に会うのかわからない。

3人ともアフリカやカリブ海にルーツを持っている。だから、その布地と、現代の欧米風のデザインを融合させているそう。アンバー

には、着物風の羽織を作ったこともあると聞かされた。

イギリスでの滞在時、とくにロンドンでは、私が誰であるのか誰も気にしていなかった。大きな街特有のものかもしれないし、さらに私が単身で、かつ常勤職員のような形での仕事がなかったこともあったと思う。悪くいえば、他人に無関心で簡単に孤立する。でもあちこちで見ず知らずの人との世間話があった。それにコミュニティーセンターや図書館で手芸教室などいろんな教室もあった。長く続いた保守党政権下でかなり縮小されていたけれども、「生きていくことは大変だから、みんなで支え合って乗り越えようね。」、そういうメッセージを強く感じた。

人に苦しむことがあったけれど、結局、人に救われた。イギリス、とくにロンドンにはいろんな人が住んでいていろんな文化が混ざり合っていた。

そういえば、ロンドンのルームメイトは、父はスコットランド人で母はジンバブエで生まれ育ったイングランド人、ルームメイトもジンバブエで生まれ育った。彼女が最後にジンバブエに入国した時、ビザが複雑だったらしく入国管理官に、次回は観光客として来るように勧められたらしい。彼女は自身をジンバブエ人だと思っている。「私はジンバブエで生まれ育っているし、運転免許証も持っているのに」と怒っていた。

いろんな文化を飲み込む食欲さやしたたかさ。別の言い方だと懐の深さを感じた。ありきたりな言い方だけれど、多文化社会だった。

私が何人であるのか、誰であるのか、誰も気にしない。日本人の私が入りか系の布地の欧米風のワンピースを着ていても。私が他人の視線に気づいてなかっただけかもしれないけれど。私には、そんな状況が、「なにもものにもなれる」、そんな気がした。

なお本エッセイはJSPS科研費19K13509の助成を受けた研究成果にかかわるものでもある。



料理教室での写真（筆者撮影）
テトとくたくたのプロッコリー
センターのカフェで提供された

上…チキンソテー、付け合わせのマッシュポ
トとくたくたのプロッコリー
右…ピクトリアケーキ（翌日、コミュニティ
センターのカフェで提供された）
左下…ジャケットポテト。